

「アジア舞踊にみる手の表現術」とアジア舞踊の実演

宮尾 慈 良

はじめに

アジア舞踊では手の表現だけを学ぶというのはほとんどない。それは足の表現にも同じことが言える。したがって、手や足をそれぞれ研究するのではなく、身体動作のなかでの手足の動きを考察しなければならない。手の動きとともに舞踊者の身体（中心）軸、腰の位置そして脚の動きなどとの関連性で舞踊動作が明らかにされてくる。

このたび日本、韓国、中国、タイ、インドの舞踊を通して、アジア舞踊における手の表現性を考察することになった。舞踊の実演者と話し合っ、手（片手と両手）の基本動作と応用、手による表現の意味性、そして舞踊の表現術を比較できるようにし、解説と実演を行った。

ここに基調講演「アジア舞踊にみる手の表現術」の要旨（2～5）と実演を報告することにする。

2 手の生理学

人間が二本足で立って歩くという直立二足歩行は、人間が前進運動をするために下肢（脚）を用いた結果である。それに対して、上肢（肩甲骨、鎖骨、上腕）は前進運動に用いないで、むしろ自分が住む周縁世界にはたらきかけて、道具を作ったり、物を運んだり、何か事物を指し示めしたりしてきた。こうして上肢が開放されて、手指の運動が発達すると、さまざまなことが手振りで表現できるようになった。人間は移動をしなくても物を指し、暗示することができた。さらに言葉が発達すると、こうした手や指で示すことが少なくなっていくが、身体動作によるコミュニケーションは手の表現から始まったといえる。手は“文化を作り出す原動力”であった。

人間は身体動作のなかで手足だけの動作をそれぞれ別々に習得してきたわけではない。基本的には、こうした動きは上半身を支えている骨盤が作りだしている。つまり骨盤を中心とした腰の位置が定まらないと歩くことが困難になるため、人間は膝を適度に曲げて、足の裏を地面に水平に移動させる動きである歩行を生み出した。そのとき身体の上下運動を小さくするために、手腕を前後に振る動きが必要であった。ところが、爪先から地面に着地したり、早く動き回るときには、身体の上下運動は激しく大きくなるので、どうしても手腕の振りを大きくして上半身を支えないと、バランスを崩して前方に倒れてしまう。そこで肘の関

節を曲げて、上下の運動を抑制することで上半身を支えるようになった。こうして人間は手、腕、肩の動きの可能性を身に付けてきたのである。

3 手の表現性

手は対人コミュニケーションからすると、視覚による身体の意味伝達であり、それにはいくつかの表現が考えられる。

舞踊における伝達行為は、おもに感情や心的な状態を示すことに使われている。それは喜怒哀楽の喜び、怒り、驚き、嫌悪、悲しみなどを表す「情緒的な手の表現」である。そののち音楽が発達すると、音とともに身体は心の動きを自由に表現するようになり、また言葉が発達すると言葉の内容を強調し、意味を明確にするために指で示す動きを使う。これが舞踊のなかで表現されると「強調された手の表現」となる。さらに、こうした動きが文化のなかで共通する身振り言語になると、それは言葉にかわる一種の記号となり、舞踊や演劇のなかでは特殊な身振りとして「文化化された手の表現」となる。

アジア舞踊は左右対称の動きが基本となっている。これは宗教的、呪術的な儀式舞踊に起源があるからであろう。すなわち人間の手の動きを観察すると、情緒的で心的な状態を表現するときの手の表現は左右対称の動きをする。たとえば、万歳、拍手喝采、大笑い、悲しみ、悔しさを表すときなどの上肢は意識しないで左右が対称になっている。また、宗教的な儀礼における身体動作の合掌、拍手、礼拝、お辞儀などもやはり左右が対称である。これはもしも非対称的な動作であると敬虔な心を保てなくなるとされるからである。

それに対して、芸術性を追及した舞踊はきわめて意識的である。なかには意図的な表現を志向するため、身振りにおける手足の動きを非対称なものにすることがある。これらの身体動作で表現されるものは、踊る人の考えや気持ちを言葉ではなく、むしろ微妙な表現や意味を伝えようとする“恣意的な舞踊”となっている。

4 手の意味作用

アジア舞踊では手の表現は片手の仕種、両手の仕種、動作表現の手がある。片手と両手の仕種はいわば言語にかわる身体語であり、アルファベットのよう役割を持ち、手が表す単語を並べて文

章を作るように手を組み合わせて舞踊の表現としている。すなわち、この表現はデノテーションとしての意味作用であるといえるが、舞踊のなかではコノテーションとしての意味作用となる。したがって、これらの手の動きや意味作用を分析しても、身体動作が伴わないと舞踊とはいえない。

この手の言語が身体化するには動作表現の手が必要となる。これらは身体の空間における方向性を指し、「上下、左右、前後」の動きである。この方向性こそ、身体を動かす原動力となるものであるが、その基本の手の動作単位はさらに「方向、方向の延長、回転、伝達」の4つに大別（詳細は枚数制限のため省略）できる。

5 手の表現とダイナミックな表現

手の生理学、意味作用、動作単位などを基礎にして、手のダイナミックな表現を考えてみたい。手の動作は空間的には上下、前後、左右、斜めに動かし、時間的には緩急に動かすことが組み合わせられて舞踊の動きとして構成されている。舞踊のなかで表現される時空間は、日常ではない非日常の時空間であるので、動きは躍動感に溢れるものになる。そこでアジア舞踊のダイナミックな表現をまとめると次のことが考えられる。

- (1) 身体の動作は左右対称である。
- (2) 手部である肘、手首、手指（足部の膝、足首、足指なども同じである）が曲げられたり、あるいは振じられたりする。
- (3) 手足を動かす速度は、リズムにあわせて緩急が取り入れられている。
- (4) 手足の動きの方向性は、身体の内側に収斂してから外側に拡散される。これはエネルギーの発散をダイナミックにする技巧である。
- (5) 手指、肩、肘の一点にエネルギーを集中させることで、強・弱／剛・柔／武・文／硬・軟（中国）／ターンダヴァ・ラースヤ（インド）／クラス・アルス（バリ）などの相反する二つの力の組み合わせが取り入れられている。
- (6) 身体軸がS型（S・Σ）あるいは振じり・螺旋状型（ζ・ξ）からなる。

6 アジアの舞踊の実演の解説

手だけの動作は運動として訓練はできても、それが舞踊表現になるには他の身体動作との関連性が必要である。舞踊における手の動作を理解するためにアジア舞踊を比較して特性を明らかにすることにした。日本舞踊の担当者・西形節子と数回の話し合いをして、手の基本位置、基本動作と表現法の資料を作成して、解説と実演は20分程度にお願いした。（敬称は省略いたします）

- (1) 日本舞踊 西形節子の解説、藤間蘭黄の実演。
手の基本位置（方向性）は上下、前後左右、斜

め、両手であり、男性と女性は二の腕の返し方で演じ分けられる。基本動作は握る、開く、受け、伏せ、反らせる、指す、かざす、くねらす、かいぐりなどの演技が行われた。指の表現では男と女、夫婦指、縁結び、組むなどと手拍子は日本舞踊特有なものである。

- (2) 韓国舞踊 李七女（お茶の水女子大学大学院）の実演。李七女は僧舞を人間文化財（国宝）・李梅芳から伝授された舞踊家である。手の基本動作は宮廷舞踊から発達した12種類がある。これは韓国舞踊を長年研究した漢城大学の舞踊学科で教えられている基本動作で、他の大学でもそれぞれの基本動作がある。僧舞における手の動作は24種で身体の動静のリズムによって、前半は静寂な動作から後半が激しく、大きく表現される。袖が流れるような動きとなったとき、内的な心が芸術的な動きとして表現されることを演じた。

- (3) 中国舞踊 范旅（日本大学副手）の解説と梁明星（舞踊家）の実演。手の表現は手と目の関係によって成り立ち、手は円を描くとともに目も同じように動かなくてはならない。手の形は掌、指、拳の三種。基本位置は横、前、上下からなる。基本訓練は指や腕は収斂、内外、肩は前後、上下の動きを練習する。京劇などでの象徴的な表現法を見ても分かるように、手の動作はそれほど多くないことが知れる。舞踊には切る、分ける、曲げる、揺れるなどの手の運動呼称はあるが、それだけを練習することはなく、つねに舞踊のなかでの演技表現として手が用いられる。

時間の関係上、范旅による「武術から舞踊」の実技が大幅に省略されたが、中国舞踊では武術は基本動作に欠かすことのできない要素である。武術は攻撃形、防衛形、健身形からなり、これらは舞踊の身体動作では姿勢（点）、身法（線）、バランス（面）を作り出している。

この武術と舞踊の関係はいま一度取り上げなくてはならないテーマであり、インドの武術カリリーパヤットと舞踊劇カタカリ、槍や剣を持った武術パリカンダとチョウ、マレーシアの武術シラットと民族舞踊、西アジアの剣舞と民族舞踊、日本の武術と能狂言、歌舞伎などの基本動作には共通する点が少なくない。

- (3) タイの舞踊 中野真紀子（舞踊家）の実演。
手の動作はさきわめて重要な意味を持つとされる。それはタイ舞踊が厳格な形式美を追求しているからである。10種類の基本動作は規定された動きのなかで意味を持ち、むしろ抑制されたなかで表現されるのは宮廷舞踊であるからである。優雅な動きを作り出す身体動作の一つとして、手の動作は規定された形と姿勢を表現しなければならない。
- (4) インドの舞踊 小田深雪（舞踊家）の実演。
28種類の片手の基本動作から組み合わせによる

表現動作を示し、それらを使ったヒンドゥー神話に登場するクリシュナ神の物語の一部を分かりやすく演じた。手の動作は言語に変わる身体語であり、手の組み合わせが舞踊の表現媒体となる。手だけでなく足や身体全体を用いることによって、ダイナミックな表現が可能となることを実演で明らかにしてくれた。

*1998年度春季第45回舞踊学会
『舞踊學』第21号より転載